

別所哲也

BESSHO Tetsuya

俳優・ショートショートフィルムフェスティバル&アジア主宰

映画、テレビドラマ、舞台、CM、ラジオ、バラエティーと幅広く活躍している俳優の別所哲也さん。表現者としてのそうした活動の一方で、ショートフィルム関連の事業を手掛ける起業家の一面も持つ。二四年前に手探りで始めたショートフィルムの映画祭は、今ではアカデミー賞公認・アジア最大級の規模にまでなった。俳優業とショートフィルム事業の両者で第一線を走り続ける裏にはどんな思いや苦労があったのか。その出会いから語っていただいた。

俳優とショートフィルムの「一足のわらじ」

「英語の勉強」から俳優の道に

——テレビや舞台で拝見し、多才な方だなという印象があるのですが、まずは俳優という仕事を選んだ経緯を教えてください。

別所 慶應義塾大学法学部に進学し、ESS（英会話クラブ）

のドラマセクションに入会したのが始まりです。体を動かし、生きた英語で表現する世界に興味を持ち、四年間、英語劇に携わりました。ですから最初は英語を学ぶための演劇だったのですが、次第に脚本を通して見えてくる海外のカルチャーや政治問題に興味湧き、何よりも人を体現して見せるという面白さを感じるようになりました。それで、俳優を志したわけ

です。

——「両親は賛成されたのでしょうか。」

別所 最初に「俳優になりた

い」と告げたときはまともに受け止めてもらえませんでしたね。「サークルでの経験程度でなれるわけがない」という感じでした。

——でも、反対されることはなかったということでしょうか。

別所 そうなんですよ。やらないで後悔するよりいろいろな経験をしたいほうがいい、という考え方の両親だったので、ありがたかったですね。

——俳優になって早々にハリウッドでデビューされていますが、そのきっかけを与えてくれたのはお父さまだったそうですね。

別所 ええ。日米合作映画（注1）に向けた英語でのオーディションを父が見つけてきて、「これから国際社会なのだからチャレンジしたらどうだ」と背中を押してくれました。

——俳優を目指すだけでも難し

いののに、さらにハードルを上げた印象を受けます。

別所 もともと大学で英語や法律を勉強したのは、世界の文化や国々とつながる仕事をしたかったからです。ですから、もし父親に勧められていなくても、いずれはアメリカやヨーロッパに行っていた気がします。

——オーディションに合格し、ハリウッドに行ったのが初めての海外渡航だったそうですね。滑り出しは順調でしたか。

別所 いいえ、全然。自信のあった英語がまったく通用しませんでした。

そのうえ、分厚い契約書を自分で読んでサインしないといけないし、車の免許も自分で取得しなければならぬ。全部ゼロからなので、ストレスもあり、かなり苦労しました。

ただ、当時暮らしたロサンゼルスは青空が広がる陽気な所なので、サンタモニカのビーチに

いながら「まあ、明日は何かなるかな」という前向きな気分にはなれましたね。

とはいえ、撮影日までにはセリフを覚えて演技をすることとか、世界中から集まってくる俳優たちと接点を持つことは、やはり緊張感を伴うものでしたけどね。

——最初の映画出演の後、アメリカでキャリアを積み上げていく考えだったのですか。

別所 そういう選択肢もあったのですが、向こうで求められる日本人像と僕自身のやりたいこととにギャップがありました。空手や剣道ができるかと聞かれたり、「身長が高くて日本人に見えないね」と言われたり……。

アイデンティティクライシ

（注1）作品名は「クライシス2050」。

一九九〇年公開のSF映画。別所氏は、太陽の膨張から地球を守るために宇宙に向かう宇宙飛行士役を演じた。

スという大げさですが、ちょっと悩んだ時期がありました。そのときに、現地で通っていた演技学校の先生から「一度日本に帰って、俳優の仕事をして、あなた自身が伝えたい人間像を確立したらどう？」とアドバイスされ、帰国を決断しました。

——日本では二〇代からたくさんドラマに出ていらつしやいましたよね。ご著書を拝読すると、三〇代になって一度立ち止まった時期があったそうですが……。

別所 たぶん皆さん同じだと思うのですが、三〇歳前後って、

ジョージ・ルーカスに紹介もなくメールを送りつけた

——そこでショートフィルムと出会ったんですね。

別所 はい。若手の監督たちが作るショートフィルムの上映会に誘われました。

「どうせつまらないだろう」という先入観があったので、見たときの衝撃は大きかったですね。たった五分でも感動できるし、

新人の頃のような新鮮さもなく、かといってベテランのような確固たるものがあるわけでもない。何か理由のない不安感に襲われる時期のような気がします。僕の場合は、自分の中の引き出しからいろいろなものを出していたのですが、それが枯渇していくような感じになりました。

あるときインタビューで「仕事以外で興味のあることは何ですか」と聞かれて、はっとしたのです。何もなくて。

それで仕事を休ませてもらって、原点回帰の意味もあって、またアメリカに行きました。

少し飛躍がありませんか。

別所 これには三つ理由があります。一つ目は、自分が体感したものを他の人たちと分かち合いたいと思ったこと。いくら言葉で感動を伝えても、共感を得られなかったものですから。

もう一つは、その翌年にロバート・レッドフォード(注2)が主宰するサンダンス映画祭に出かけ、「映画祭って本当にいいな」と思ったことです。

そして三つ目は、同じ時期の一九九八年のアカデミー賞で、日系アメリカ人のクリス・タシマさんの監督作品「ビザと美德」が短編実写映画賞を受賞したことです。第二次世界大戦時に六〇〇〇人ものユダヤ人を救ったリトアニア大使の杉原千畝(ちうね)さんを題材にした作品でした。僕はNHKの司会役でその会場にいたので、日系人が日本人をテーマにショートフィルムを撮ってオスカー像を握ったことに、何か運命的なものを感じましたね。それで動きだして、今日に至ります。

——しかし、俳優を続けながら映画祭を主宰していくのは、ご

苦勞が多いのではないですか。別所 よく「二足のわらじ」と言われるのですが、自分が楽しくてやっていることですし、俳優業と映画祭に線引きしたことはないですね。エンターテインメントという根っこは同じだと思います。

もちろん、苦勞はあります。華やかなレッドカーペットなんて見えている世界の二%ぐらいで、九八%は契約書の作成やら交渉やらの地道な作業です。特に最初の頃は仲間三人でやっていたので、毎日のようにファミリーレストランで書類作成をし、



1999年、アメリカ大使館にてジョージ・ルーカス監督と共に撮影



べっしょ・てつや●1965年生まれ。静岡県出身。慶應義塾大学法学部卒。87年、舞台で俳優デビュー。90年、ハリウッドデビュー。米国映画俳優組合(SAG)会員となる。帰国後、数多くの映画、ドラマ、舞台、CM、報道番組等に出演。99年、日本発の国際短編映画祭を主宰、「ショートショートフィルムフェスティバル」として現在まで続く。2006年、ショートフィルム関連の事業を行う(株)ビジュアルボイスを設立、代表取締役就任。08年、横浜みなとみらいにショートフィルム専門の映画館を開館し、18年にオンラインに移行。受賞歴に、文化庁長官表彰、岩谷時子賞奨励賞、横浜文化賞など。観光庁「VISIT JAPAN 大使」、映画倫理委員会委員、外務省「ジャパン・ハウス」有識者諮問会議メンバーなどを歴任。2012年には、「内閣府・世界で活躍し『日本』を発信する日本人の一人」に選出されている。著書に『夢をカタチにする仕事力—映画祭で学んだプロジェクトマネジメント』(光文社新書)がある。

国際電話をかけていました。隔月ペースでアメリカにも行っていましたね。一泊二日など。

——二つを並行することについて、ご著書では「**橋田思考**」と書かれていますね。

別所 軸が二つあると、幾何学的には安定的なオーバル(橋田のような曲線)になりますよね。僕の場合は、俳優業と映画祭の二つの軸があって、大きな弧を描いています。

二つの視点を持つことは大事だと思っています。俳優の仕事でも、演じながら自分を俯瞰している部分がありますね。

——映画祭立ち上げの過程では、幸運もあったようですが。

別所 ジョージ・ルーカス監督(注3)が学生時代に撮った

ショートフィルムをお借りできたというのがありますね。自分でもよくそんなことをしたなと思うのですが、あのときは紹介者もいないまま、英語で直接メールを送りました。あなたの作品を日本で紹介したい、それは僕にしかできないことで、このチャンスを逃したら二度とあなたのショートフィルムが日本で紹介されることはないかもしれない……というような内容でした。おかしな日本人だと思われたでしょうね。

——熱意が通じたのですね。
別所 ビギナーズラックですよ。

でも、情熱が人を動かすというのは確かに実感しました。あと、映画祭のパンフレットでのジョージ・ルーカス監督のつづりを間違えるなど、今だから笑えるようなトラブルも舞台裏では色々あったんですよ。

——先頭に立って映画祭を育ててこられたわけですが、目指しておられるリーダー像などおありですか。

別所 自分ファーストではなく、お客様のためにと考えられることが大事でしょうね。エンターテインメントの仕事は特にそうですが、お客様がいなければ何も生まれませんから。

それと、仲間を大切にすることだと思っています。僕が大事にできた言葉に「早く行きたければ一人で行きなさい、より遠くに行きたければみんなで行きなさい」(注4)というのがありますが、継続していくうえでも、仲間と助け合うことが重要だと思います。

エンターテインメントが世界を広げてくれる

——ところで、俳優業、映画祭において新型コロナウイルスの影響は深刻だったのではないですか。

別所 コロナ禍はいろいろな気

ば一人で行きなさい、より遠くに行きたければみんなで行きなさい」(注4)というのがありますが、継続していくうえでも、仲間と助け合うことが重要だと思います。

(注2) アメリカの俳優、映画監督、映画プロデューサー。出演した代表作に「明日に向かって撃て!」「スティング」など。監督作品に「普通の人々」など。一九七八年からユタ州で長短編映画を上映する「サンダンス映画祭」を主宰している。なお、「サンダンス」の名称は「明日に向かって撃て!」で演じた役のサンダンス・キッドに由来している。

(注3) アメリカの映画監督、映画プロデューサー、脚本家。「スター・ウォーズ」シリーズや「インディ・ジョーンズ」シリーズ、「アメリカン・グラフィティ」などで知られる。

(注4) アフリカのことわざ。岸田文雄首相が最初の所信表明演説で引用したことでも知られる。

付きというか、新たな世界を生み出したのではないかと思っています。もともと僕らが歩まなければいけなかったテレワークとかキャッシュレスなどの未来

SHORTSHORTS

FILM FESTIVAL & ASIA

「ショートショート フィルムフェスティバル&アジア」ロゴ。映画祭は2023年に25周年を迎え、都内複数会場で6月6日～26日まで開催された（オンライン会場は4月27日～7月10日まで）。
<https://shortshorts.org>



ショートショートフィルムフェスティバル&アジア2022 アワードセレモニーの様子

を、「コロナ」が強引に連れてきたという印象を持っています。

僕たちのエンターテインメントの世界も、公演中止や、人との分断を体験しましたが、そのことによって改めて、人間はただ食べて寝て死ぬという存在ではないことを思い知らされました。泣いたり笑ったり憧れたりする体験がどんなにかかけがないことを見直させられ

たように思います。

—— 未来という点では、ショートフィルムのオンライン配信にいち早く取り組まれました。

別所 二〇〇八年から一〇年ほど横浜などとみらいにショートフィルム専用の映画館を常設していたのですが、一八年にオンライン化に切り替えました（注5）。当時は「まだ早い」という反対意見が多かったですけどね。

—— 俳優業、映画祭のそれぞれで、今後は何を目指していかれるのですか。

別所 AIや新しい道具がどんどん出てくるなか、これからの人間の面白さや危うさを見せるときに、俳優やメディアにできることはもっとあるような気がしています。年を重ね、いろいろな体験をしてきた自分だからこそ表現できることもあると思っています。

同時に、これは年を重ねた動物の本能なのかもしれませんが、俳優業、映画祭のいずれでも、次世代の人たちとどうつながり、どうたすきを渡していけるかを考えるようになりました。

—— 映画祭やショートフィルム

に関しては、今後の可能性をどう感じていますか。

別所 ショートフィルムは時代を映す燃費のいい映像情報ですから、人の心とつながりながら、例えば知的財産として金融商品化されるなど、大きな変化を遂げるのではないかとみています。

—— ビジネスとしてどうマネタイズするかという話は、特に文化や芸術の分野では好まれないのかもしれませんが、大事なところですよ。

別所 おっしゃる通りです。エンターテインメントもちゃんとそこに根付いています。

まずは、数値化して客観視できるようにすることが大事です。例えば、この映画祭は何億円のバリエーションがあり、何千人の集客がある、というようなことです。その大小が問題なのではなく、ちゃんとインデックスを付けることが大事だと思います。

—— 後進へのメッセージを頂けますか。

別所 好きな作品には何度でも触れること。同時に、関心のなものに嫌でも触れていくことです。僕自身、その結果とし

てショートフィルムに出会っていますから。

ネットのレコメンド機能（注6）などで知らず知らずのうちに世界が狭くなりがちな環境だからこそ、その枠を飛び越える力が必要です。その点では、ショートフィルムは本当にいいですよ。短い間に自分の考えてもいないような世界に連れて行ってくれる奇想天外さがあります。心の中にあるだんだん凝り固まっていた世界をエンターテインメントがほぐしてくれるときがあるのです。

—— 今日楽しいお話をありがとうございました。

（注5）常設の映画館は、二〇〇八年二月に「ブリリアショートショートシアター」の名称で横浜みなとみらいに開館。一七年末に閉館し、一八年二月にオンラインシアター「ブリリアショートショートシアターオンライン」に移行した（<https://stt-online.jp>）。

（注6）ウェブサイトへのアクセス履歴等を情報収集し、その利用者と類似する関心を持つ他の利用者に関連づけ、グループ化し、類似した利用者がよく見ているが、その利用者はまだ見ていない商品を表示させる仕組み。